

最近5年間（2007-2011年）の丹沢トレッキングクラブの歩み

TTC 15周年記念誌編集委員会編著

1. まえがき

1997年3月に11人の発起人によって旗揚げした丹沢トレッキングクラブ（略称：TTC）は、神奈川県県央地区をフランチャイズとする地域山岳同好会として活動を続け、今年で創立15周年を迎えた。5年前の2007年3月に10周年記念誌「やまなみNo.2」を発行し、その冒頭を飾る記事として、クラブ創立の経緯や活動の基本方針、並びに10年間の活動内容について「丹沢トレッキングクラブ10年間の歩み」としてまとめ掲載した。これは、TTC 創立メンバが掲げた高い理想と活動の記録を後輩メンバに正しく伝えたいとの思いから編集されたものである。本文はその続編を成すものであり、1997年から2011年の最近5年間のTTCの活動状況について、種々のデータを整理してわかりやすく図表にまとめ、その活動内容を正確に記述し、TTCの公式記録・活動の証として、今後のTTCの活動に有効に役立てることを目的に執筆・編集したものである。

2. 活動の概要

最近5年間のTTCの主な出来事、イベント、トピックス等について、表1にまとめて示した。なお、活動分野毎の活動内容の詳細については、以下の各項目に述べる。

2.1 メンバ数の推移

TTC 創立10周年の節目を迎えた2006年、それまで新規メンバの募集を積極的に実施してこなかったこともあり、メンバの平均年齢が毎年ほぼ確実に1歳上がり、クラブのアクティビティが目立って下がり始めた。そこで、TTC活動を今後どのような基本方針で進めるべきか、世話人会で真剣に議論し、メンバ全員にアンケートで意向を聞いた。その結果、高い理想を掲げ、メンバのWillと絆を何よりも大切に、安全行動第一主義に徹底した活動で、この10年間に築き上げた地域山岳同好会としての良き伝統を新たな山岳同好の志に引き継いで行ってもらうという新方針が、メンバの圧倒的多数の支持によって決定された。とは言っても、TTCのリーダ層の人数等から、安全登山を担保しながら実施できる山行パーティメンバ数の上限や受け入れた新人の指導・育成能力等を総合的に判断すると、当面50名をメンバ数の上限とした上で、新規メンバを受け入れるこ

ととし、ホームページに新会員募集のコーナーを常設した。入会希望者があった場合は、至近の例会に出席頂いて、クラブの雰囲気を実感して頂くとともに、希望があればお試し山行等を経験した上で入会の手続きをするようお薦めしている。

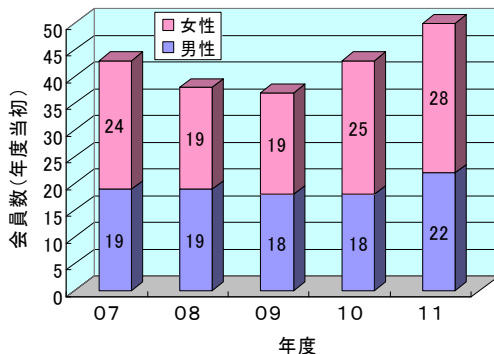


図1. TTCメンバ数の推移

最近5年間のTTCメンバ数（年度当初）の推移を図1に、メンバの平均年齢の推移を図2に、また、2011年10月時点でのメンバの年齢分布を図3に示す。この5年間の年度当初時点での現役メンバ数は37～47名で、2012年1月現在、49とTTC発足以来最多のメンバ数まで増えている。男女比率では、男性が18～22名ほぼ一定であるのに対し、女性が19～28名とに過半数を占める。この他に休会中のメンバが毎年5～8名在籍している。メンバの平均年齢は61.1歳(07年)～59.8歳(11年)で推移している。新規入会者の大半は、当クラブのホームページを閲覧し、当クラブの活動方針や活動内容に共感して入会を希望され、当クラブに問い合わせを戴いた方である。メンバの居住地は、厚木市が最多で、その他、愛川町、秦野市、平塚市、大磯町、茅ヶ崎市、海老名市、座間市、相模原市、横浜市、川崎市、町田市と神奈川県県央地区以外にも広がりを見せている。

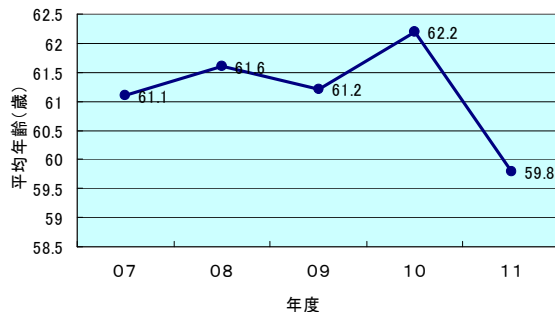


図2. メンバ平均年齢の推移

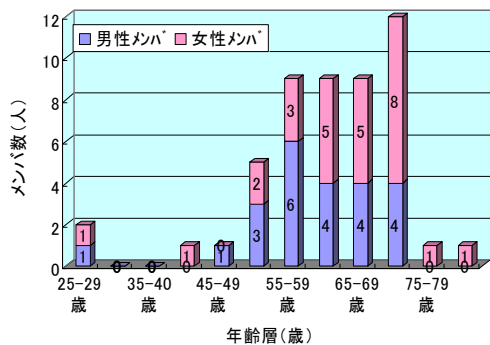


図3. TTCメンバの年齢構成

現役メンバ 49 名の年齢構成は、図 3 に示すように、20 代後半から 80 歳まで分布しており、その内、50 歳代前半から 70 歳前半が主力メンバである。最多年齢層である 70 歳前半の大半は、15 年前の TTC 設立以来のメンバである。15 年前 33 名の同志で発足した TTC であるが、約半数の 16 名が現役メンバとして残っており、それらメンバの大半が 70 歳を迎えた。当クラブ最年長は 80 歳の創立時からの女性メンバである。50 歳代の後輩メンバに負けず劣らないパワーとスピードの持ち主で、当クラブ主催山行に活発に参加されており、生涯現役を貫く手本として、メンバ全員から尊敬され目標になっている。当クラブの弱点は、30 歳代の若いメンバが欠けていることである。今後 TTC をより活性化するためにも、この年齢層に加入頂けるような対策が必要である。

2.2 TTC 主催山行

2004 年度に、TTC 主催山行の形式を、定例山行とメンバ提案山行の 2 種類に整理し、以来今日まで、この分類のもと山行を計画立案して実施している。

定例山行は、概ね毎月 1 回 TTC メンバならどなたでも無理なく参加できるレベルの山域・行程を選び、日帰り山行を中心に、年 2~3 回の 1 泊 2 日行程での宿泊山行も加えて実施している。毎年 12 月第 3 週末に実施される 12 月例会を兼ねた温泉泊での忘年山行も恒例になっている。定例山行では、その趣旨から参加希望のメンバ全員が参加出来るよう交通手段、宿泊先確保等にも留意して立案・実施している。

一方、メンバ提案山行は、メンバの多様なニーズに応える山行として、メンバから提案・計画されて実施されるもので、天幕縦走や中級程度までの沢漕行、丹沢山域でのバリエーションルートの縦走等の比較的レベルの高い山行から、お花見やお月見、ダイヤモンド富士、氷瀑鑑賞、鍋パーティ山行、スノーハイキングやテレマークスキー山行、シニアメンバの要望で 2011 年度に創設された温泉をメインに

した(ゆ)ったへり山行等、種々のイベントを含む多彩な内容の山行が実施されている。メンバ提案山行では、山行内容やコース、日程は勿論、パーティメンバの募集定員やメンバの実績等を考慮しての応募資格設定、パーティスタッフ指名等の権限は、原則として提案者に任されているところが定例山行と大きく異なる点である。

ただし、どちらの形式の山行であっても、計画が立案できた段階で、山行計画係の責任者が、主として安全登山の観点から内容をチェックし、計画の不備や不十分な箇所があれば、その是正や手直しのアドバイスを行っている。このようにして山行計画書の完成度を高めたうえ、TTC 統一フォーマットに則った山行計画表にまとめられているので、TTC 主催山行である限り、その計画書の品質は一定レベル以上に維持されている。完成した山行計画書は、電子ファイルでメンバ全員に配付されたうえ、実施 2~3ヶ月前の例会で内容の説明を兼ねて提案される。次回の例会等で参加希望者を募り、その応募者の中からパーティスタッフを決定する。チーフリーダー (CL) は計画立案者が担当するのが一般的だが、別なメンバが CL を担当する場合もかなりある。定例・提案の何れの山行であっても、山行計画書の内容をとくに安全面を中心に TTC としての合格レベル以上にまで仕上げ、TTC が主催する山行として計画から実施まで一貫して責任を負う体制を明確に定めている。なお、この 5 年間に計画・実施された TTC 主催山行(定例山行及びメンバ提案山行)の実施状況については、本文の付属資料として添付されているので、そちらをご覧ください。

また、TTC では「山行計画の立案/山行の実施/山行記録のまとめ」を山行に関わる一連の行為と位置づけ、山行計画書とともに、山行記録の作成にとくに力を入れている。詳細かつ正確な山行記録は、当クラブにとって最大の財産であり、次回に品質の高い山行計画書を立案する際にもっとも信頼の置ける最大・最高の参考資料として大いに威力を発揮している。従って、山行実施後速やかに TTC の統一フォーマットに則ったクオリティの高い山行記録表にまとめられ、TTC メンバ全員に配付される。山行記録表は担当 CL、あるいは CL が指名した記録係によって作成される。なお、この 5 年間に作成された TTC 主催山行の山行計画書並びに山行実施記録表は「やまなみ No. 3」の第 3 部: 資料集 2 にまとめられている。

この 5 年間の TTC 主催山行の実施回数を宿泊山行と日帰り山行に分けて図 4 に示す。2011 年度は 12

年度	月	主な出来事
2007年度 (H19年度)	3月	H19年度総会開催。世話人代表にKTさん選出。記録保管係(写真/資料)創設。メンバー43名(休会4名)でスタート。リーダー層の創立時メンバーから新メンバーへの若返り策推進。
	4月	TTCの組織内で活動してきたゼロックスコピー機をCanonモノクロレーザーOA複合機に更新。 TTC10周年記念誌「やまなみNo.2」のDVD版並びに過去10年間の活動資料を集成したTTCアーカイブDVD版を制作。
	5月	TTC創立時メンバーのKD氏(享年66歳、休会中)ご逝去。
	6月	「TTCメンバー間の電子メール利用ルール」及び「マイクロバスの立ち寄り先・順路に関するルール」を制定。例会会場を緑が丘公民館から睦合南公民館に移す。
	7月～10月	KTさん(7月幌尻岳TTC:6人目)、CSさん(8月黒部五郎岳・薬師岳:7人目)、OFさん(9月悪沢岳・赤石岳:TTC8人目)、UKさん(10月雌阿寒岳:TTC9人目)が相次いで日本百名山登頂達成。
	11月～1月	TTCホームページメモリ容量1桁増強(1GB)とリニューアル。掲載資料の個人情報保護強化策を実施(TTC通信を会員専用ページへ移動、個人情報の削除、掲載写真ルール策定等)。
	3月	これまで最高の33回のTTC主催山行を実施(参加者:延べ432人/宿泊山行18回/メンバー平均参加:10.0回/年)。例会出席者総数:281人(出席率:59.4%)。HPアクセス数:6658件と昨年度の1.4倍増(HPリニューアルによる内容充実の効果)。安全登山教室7回開講。
	3月	H20年度総会開催。世話人代表留任。メンバー37名(休会7名)でスタート。山岳保険を日山協共済の軽登山コースからオールリスク型の山岳登山コースB型に変更。
2008年度 (H20年度)	6月	未丈が岳山行渡渉中に女性メンバーが右足小指を骨折(8年ぶり)に事故発生。 「TTCマイカ山行の車両利用規定」を見直し、一部改訂。
	7月	北ア白馬岳・朝日岳山行で、TTC主催山行として百名山全山登頂達成。
	9月	SSさんが日本百名山登頂達成(笠が岳:TTCとして10人目)。
	12月	今冬よりマイクロバスを利用する際は安全性の観点からスタッドレス装着車を使用。
	3月	TTC主催山行29回実施(中止8回、参加者:延べ362回/宿泊山行15回/メンバー平均参加回数9.3回/年)。例会出席者総数:297人(出席率:65.1%)。安全登山教室:8回開講。HPアクセス数:5850件(昨年度より約800件減)。リーダー層の若返り策着々と進む。 メンバーへの写真配付方式が、ペーパープリントまたは写真データメール添付方式から、Webアルバム公開方式への変更がほぼ定着。
2009年度 (H21年度)	3月	H21年度総会。世話人代表にIUさん選出。メンバー37名(休会6名)でスタート。
		マイクロバス山行での実施3日前の天気予報により実施可否判断が定着(悪天候による中止5件)。
	7月	YMさんが日本百名山全山登頂(トムラウシ山)。百名山既登頂者の新入会員MEさんを含めTTC12人目の百名山登頂者。
	9月	TTC通信No.150記念号発行。以降、A4判1ページ構成から2ページ構成に紙面を充実。
	10月	朝日新聞2009年10月3日朝刊第2神奈川北版にTTC紹介記事が掲載。
	11月	背戸峨廊の岩場で男性メンバーが転倒して左肩脱臼の負傷(昨年に連続して怪我発生)。
2010年度 (H22年度)	3月	TTC主催山行35回実施(中止10回、参加者:延べ425回/宿泊山行17回/メンバー平均参加回数9.9回/年)。例会出席者総数:298人(出席率:63.0%)。安全登山教室9回開講。HPアクセス数6,813件(昨年度より約1000件増)。年度途中で新規加入者6名あり。
	3月	H22年度総会。世話人代表留任。メンバー42名(休会6名)でスタート。
	7月	重大な山岳事故に繋がりがかねないヒヤリハット事例が3件発生。ヒヤリハット報告制度を創設し、その防止策を含め、全員に周知。
	10月	TTCの活動方針に関わるメンバー意向調査を5年振りに実施し、これまでの活動方針が支持されていることを確認。 マイクロバス利用山行における巡回ルートをアクセス時間短縮と公平性の観点から見直し。 MMさんが日本百名山登頂達成(那須岳)、TTC13人目の達成者。
2011年度 (H23年度)	3月	TTC主催山行33回実施(中止7回、参加者:延べ448名/宿泊山行16回/メンバー平均参加回数:10回/年)、例会出席者総数340人(出席率:67%)。安全登山教室8回開催。HPアクセス数5920件(昨年度より約900件減)。HP会員専用コーナーを大幅強化。年度途中で新規加入者7名あり。
	3月	H23年度総会。世話人代表に佐藤清さん選出。世話人20名体制。メンバー47名(休会6名)とTTC創立以来最大の会員数でスタート。 山岳保険を日山協共済の山岳登山コースB型と日本山岳救助機構(JRO)の互助制度の選択制に変更(前者15名、後者31名)。 シニアメンバー向けゆったり(あった〜り)山行創設。本年度2件設定。
	4月	東日本大震災義援金として、山行カバ金から10万円、メンバーからの募金15.7万円/合計25.7万円を日本赤十字社に拠出。
	5月	15周年記念イベント第一弾として「大山集中登山」開催。コースに30名参加。
	7月	15周年記念イベント第二弾として「後立山ルネ登山」を開催。コースに28名参加。 後立山ルネ山行でマイカ自損事故発生。マイカ山行車両利用規定で処理。ヒヤリハット報告書にて周知。
	8月	TTC創立時メンバーで現役メンバーとして活動中の最年長のKMさんが80歳の誕生日を迎える。
	12月	検索サイトでTTC-HPからの個人情報の一部が流出。HPの運用を一時停止して対応。
	3月	TTC15周年記念誌「やまなみNo.3」発行(予定)。 定例山行12回/提案山行24回を計画し、2012.3.10現在23回実施(延べ参加366名)。

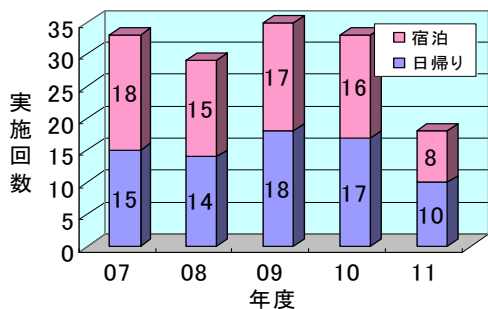


図4. TTC主催山行実施回数の年度推移 (2011年度は12.30まで)

月末までのデータである。なお、このデータには悪天候やその他の都合で中止された山行は含まれていない。この間の年間実施回数は概ね30回前後であり、毎月平均2.6回程度実施されていることになる。例会開催日にはTTC主催山行は原則として実施しない。また、後立山リレー山行のように6パーティがほぼ同時に行動するような山行も希にはあるが、基本的に複数の山行を同一週末に実施することはほとんど無い。また、山行は基本的に週末に実施され、平日に実施することは少ない。従って、1ヶ月ほぼ4回ある週末のうち、例会が実施される1回を除く3回の週末のほとんどにTTC主催山行が計画実施されていることになる。図4からわかるように日帰り山行と宿泊山行の比率はほぼ半々である。

図5は年度毎の山行参加者数を日帰り山行と宿泊山行に分けて示したものである。山行の実施回数はほぼ半々であっても、宿泊山行の方が参加者総数が少ないので、宿泊山行の方がパーティメンバー数が少ないことがわかる。ちなみに、年間山行実施回数35回の最多の実績を残した2009年度のデータでみると、1山行当たりの平均パーティメンバー数は、日帰り山行では15.9人、宿泊の山行では8.1人となっている。

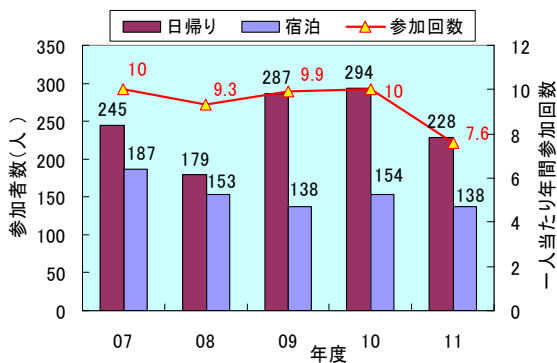


図5. TTC主催山行への参加者数/一人当たりの年間参加回数 (注:2011年度は12月末まで)

図5にはまた、メンバー一人当たりの年間参加回数の平均値も示してある。その値は8~10回の範囲内で、年度によるバラツキは余りない。このデータからTTCメンバの大半は毎月1回弱程度の頻度でTTC主催山行に参加し、TTCの仲間とともに大自然の中で登山を満喫していることがわかる。

図6にTTC主催山行(計画されたが悪天候で中止になった山行計画も含む)の交通アクセス手段を、定例山行とメンバ提案山行に分けて、円グラフで示す。なお、北海道まで飛行機で行き、現地はレンタカ移動した場合は主要な交通機関である公共交通機関利用に、また、登山口近くまでマイカで移動し、それ以降タクシーあるいは路線バスを利用した場合はマイカ利用に、往路はマイクロバスを利用し、帰路は公共機関を利用した場合は往路のマイクロバス利用に、それぞれ分類してある。

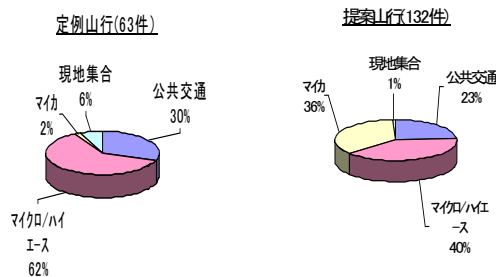


図6. TTC主催山行の交通手段

特別な理由がない限り、参加を希望するメンバ全員に参加できるような計画立案することが原則の定例山行では、定員約25人のマイクロバスあるいは参加者が13名以下の場合は15人乗りハイエースのレンタカを利用した山行が約62%と過半を占め、残りは公共交通機関を利用した山行で、その比率は約30%である。それに対し、メンバの多様なニーズに対応して、種々の山行形式でかつ比較的少人数のパーティで実施されることが多いメンバ提案山行では、マイクロバス等のレンタカ利用山行が約40%、公共交通機関利用が約23%である他、マイカ利用山行が約36%を占める。TTCでは、メンバが所有する車を山行に参加するメンバが交代で運転するいわゆるマイカ利用山行は、交通事故のリスクが相当程度あり、また、万一の場合の賠償責任等の事故処理に多大なエネルギーを要することが予想されることから、定例山行ではマイカを利用しての山行は実施しないことにしている。しかし、パーティの人数が少ない場合、費用が安価で済み、早朝や深夜に出発・帰着出来るなど、他の交通機関利用では容易に代替できないフ

レキシビリティと利便性があることからマイカ利用山行を推奨はしないものの容認している。しかし、山行に利用できるメンバ所有マイカの中で、人身事故は勿論、自然災害や自損事故による車両損傷等のあらゆる種類のアクシデントが補償対象となる低リスクの自動車保険に加入しているマイカは意外と少ないのが現状である。従って、単独での事故や落石等の自然災害による自損事故等の補償対象外になりやすい事故が発生してしまった場合は、マイカ所有者とドライバだけに留まらず、同乗者や同行者にも多額の費用負担が発生してしまうリスクは避けられない。そこで、TTCではマイカ利用山行での車両利用規定を2003年度に定めた(表4. 規約・規定集リスト4項参照)。それ以降マイカ利用車両の規制、事故時の責任並びに費用分担等に関し、その規定の定めに従って運用しているが、交通事故による諸々のリスクを解消する名案は正直見つからない。2011年7月実施のマイカ利用山行において、TTC初のマイカ自損事故が発生し、TTC規定の初の適用ケースとして先例となるため、メンバ間の費用分担等について関係者への事前了解と世話人会での事前承認等慎重に処理された(表5. ヒヤリ・ハット事例8項参照)。

定例山行とメンバ提案山行を合わせたTTC主催山行全体でみると、マイクロバス等のレンタカを利用した山行が約50%(年間平均:18.4件)、公共交通機関とマイカ利用山行がそれぞれ約25%となっている。レンタカによるマイクロバス並びに15人乗りハイエース利用山行では、当クラブメンバで普段から大型バスの運転を職業としているIさんにTTC専属ドライバとしてすべて運転をお願いしている。早朝厚木を出発し、厚木市内を中心に要所々々5~6箇所までメンバをピックアップした上、片道100~250kmを運転して、登下山口に送って頂いた上、下山するまで長時間待機して頂いたり、あるいは、下山口までレンタカを回送したうえで長時間待って頂いたりしている。また、メンバが下山するまで1~2泊麓の宿で待機して頂く場合も多い。また、下山してくるメンバのために、冷えたビールや飲み物を用意して頂き、下山してすぐに渴いた喉を冷たい飲み物で潤す、何とも有難いサービスを提供して頂いている。また、メンバが疲れた身体でマイカを運転して帰るといった辛さや交通事故発生リスクもないことから、レンタカ利用山行に対するニーズが非常に高く、TTC主催山行の約50%が専属ドライバ運転によるマイクロバスやハイエース利用山行という実績に繋がっている。このように、Iドライバの存在無

くしてTTC主催山行は実施できないほど、TTCにとって重要かつ掛け替えのない存在になっている。

2007年3月に、TTC創立後第1回山行を実施した思い出の地、丹沢三ノ塔ヨモギ尾根にて、31名のメンバに加え、TTC主催山行で2度の出会いがあったみなみらんぼうさんと玉川アルプホルンのメンバ等7名をゲストに迎えての10周年記念イベント山行と鶴巻温泉での夕べの宴を盛大に催した。また、2007年度は、南北アルプスは勿論、北海道から九州まで、全国各地においてTTC主催山行が活発に展開された。

2008年度は、奥秩父山系での2泊行程での天幕縦走や旭岳~トムラウシへの大雪山系での4泊5日行程での天幕大縦走等の他、7月に実施した北ア白馬岳~朝日岳縦走山行で、TTC主催山行として日本百名山全山登頂を果たした。



2007年3月、TTC創立10周年を記念した登山がTTC発足後最初に登った丹沢三ノ塔ヨモギ尾根コースで盛大に実施された。

2009年度には、鷹の巣尾根と恋の岐川遡行コースからの平が岳集中登山、3泊4日行程での東西50kmにわたる丹沢山塊大縦走等の意欲的な山行の他、北海道、東北、上信越、南北アルプス等の各地で活発な山行が実施された。

2010年度では、TTC初となる北ア槍・穂高岳縦走における大キレット越えの他、丹沢大山北尾根から浅間尾根までの南北約30kmに及ぶ大山山塊大縦走、静岡・山梨県境の天子山塊25kmに及ぶ天幕縦走等のバリエーションルート山行、西丹沢での読図山行や相模川河原での芋煮パーティ等のイベントも盛んに実施された。

2011年度はTTC創立15周年を記念したイベント山行として、5月に6コース/総勢30名参加による地元大山での集中登山を実施した他、7月には北アルプス後立山山域の白馬岳~五龍岳~鹿島槍岳~針ノ木峠区間(総歩行距離約45km/累積標高差:登り約4500m/下り約5000m、総歩行時間約42時間)において、6パーティ編成/総勢28名の参加を得てリレー登山を実施した。これは、本隊は5泊6日行程で、各パーティは1~4泊で白馬大雪溪、八方尾根、遠見

尾根等から登って、本隊と各パーティをタスキで繋ぐリレー登山である。6パーティの見事な連携プレーによりTTCの絆のタスキを繋ぎ、白馬岳から針ノ木峠までのリレー縦走を見事成功させ感激を分かち合った。また、シニアメンバの希望により、本年より温泉泊を中心にしたゆった〜り山行が創設され、2件が実施された。



2011年7月、TTC創立15周年を記念して北アルプス白馬岳〜針ノ木峠間の後立山で6班に分かれてのリレー登山が実施された。

なお、TTCメンバの中に、登山を趣味として始めた自身の足跡として、日本百名山を是非完登したいという意向を持つメンバがかなりおり、創立8年目の2005年頃から、TTCメンバの中に百名山全山完登者が始まった。2011年12月現在、TTCメンバの日本百名山完登者は表2に示すように、男性4名/女性9名/合計13名に達している。

表2. TTCメンバの日本百名山登頂達成者

No.	氏名	達成時年齢	達成年月	百座目山行
1	A(女性)	64	2005.6.7	那須三山*
2	B(女性)	57	2005.7.16	鳥海山
3	C(女性)	66	2006.7.14	幌尻岳
3	D(女性)	64	2006.7.14	幌尻岳
3	E(男性)	64	2006.7.14	幌尻岳
6	F(男性)	67	2007.7.12	幌尻岳
7	G(男性)	64	2007.8.8-9	黒部五郎岳・薬師岳
8	H(女性)	67	2007.9.22-23	悪沢岳・赤石岳
9	I(女性)	61	2007.10.28	雌阿寒岳
10	J(男性)	61	2008.9.12	笠ガ岳
11	K(女性)	—	—	TTC入会前に達成
12	L(女性)	66	2009.7.12	トムラウシ山
13	M(女性)	66	2010.10.3	那須三山*

* 那須三山: 茶臼岳・朝日岳・三本槍岳

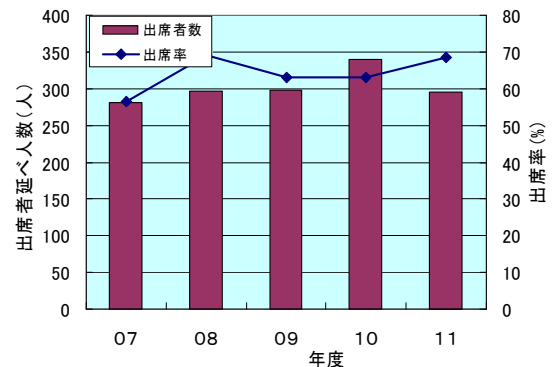
2.3 TTC例会

TTC活動基盤の一つに、毎月第3土曜日夜19:30〜21:00の時間帯に開催される月例会がある。開催場所には主として厚木市睦合南公民館が使用される。なお、3月は第2土曜日にTTC総会として、前年度の活動報告や決算報告、次年度の活動方針、予算案、年間山行計画、世話人等の選任・執行体制等クラブとして重要な事項が審議・決定される。12月は忘年

山行の際に宿泊先で開催される。また、8月は通常夏休み休会としている。

例会では、山行計画の提案・説明、山行実施結果の報告、山行の募集並びに当該山行のスタッフの決定、世話人会報告をはじめ、TTCの重要案件はすべて報告され審議され、周知される。また、例会に先立って、世話人会(18:00〜18:30)と安全登山教室(18:30〜19:30)を開催している。

図7に最近5年間の例会への出席状況を示す。この5年間、60%台の出席率で推移している。ここ最近、厚木市以外のメンバが約30%まで増えたが、小田急本厚木駅からバスで20分を要する例会会場まで足を運ぶのが物理的に大変なか、出席率約60%を維持しているのは、例会での情報収集、メンバ間のコミュニケーション、安全登山教室での知識や技術の習得等、有意義で楽しい時間であると多くのメンバに評価していただいているものと考えている。なお、欠席したメンバに例会での決定事項や議事内容を正確かつ迅速に周知する手段として、例会議事録を毎回作成し、電子ファイルにてメンバ全員に配付している。



2.4 世話人会

表3に最近5年間の世話人とその担務を一覧にして示す。TTCではクラブ創設以来、会長はおかず、世話人による集団指導体制のもと、世話人全員一致による民主的運営を基本に地域同好会としての活動を行っている。登山経験が豊富で意欲のあるメンバに多数に新規入会頂いており、その中から新たに世話人をお願いしている。2011年度現在の世話人は20名に増え、TTCの執行部の一員として種々の担当分野の活動に参画頂いている。世話人は原則として、全員計画係に所属し、山行計画立案、山行時のリーダー、山行記録書作成等の山行リーダーとしての役割も果たしてもらっている。TTCの対外的な代表者としての世話人代表は、任期1年とし、2期連続して勤めて頂くことが慣例になっている。現世話人代表の

担務	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
世話人代表	正: 副:	正: 副:	正: 副:	正: 副:	正: 副:
広報係					
ホームページ運用係	氏名削除	氏名削除	氏名削除	氏名削除	氏名削除
連絡係					
議事録係					
会計係					
印刷・発送係					
救護係					
記録保管係	(写真) (資料)	(写真) (資料)	(写真) (資料)	(写真) (資料)	(写真) (資料)
計画係(責任者)	正: 副:	正: 副:	正: 副:	正: 副:	正: 副:
(担当者)	氏名削除	氏名削除	氏名削除	氏名削除	氏名削除
個人山行受付係					
山行募集集計係					
技術係					
装備係					
会場予約係					
顧問	(1名)	(2名)	(2名)	(2名)	(3名)
世話人数	16名	17名	17名	18名	20名
会計監査	2名	2名	2名	2名	2名

表4 TTCの規約・規定類リスト

No.	規約・規定の名称	制定年月	HP掲載の有無	備考(改定履歴等)
1	丹沢レッキングクラブ設立趣意書	1997.3	×	TTC設立に際しての発起人11人による決意表明
2	丹沢レッキングクラブ規約	1997.5	○	TTCの会則。休会及び復会の項目追加(2001.3)
3	ドライバ謝礼金基準	2001.8	○	TTC専属ドライバに運転をお願いする際の謝礼ルール
4	TTCマイカー山行の車両利用規定	2003.1	○	マイカー利用山行が増えてきた事態に対応して制定
5	TTC共同装備貸出規定	2003.7	○	TTC所有共同装備のメンバへの貸し出しルールの明確化
6	TTCメンバ提案山行運用規定	2003.12	○	提案山行創設に当たり、提案山行を定義
7	TTC個人山行届出規定	2004.3	○	個人山行時の万一の場合のTTCとしての支援体制等
8	TTC主催山行への申込・取消に関する規定	2006.7	○	TTC主催山行への申込・取消のルール・キャンセル料のルール化
9	定例山行におけるマイクロバス立寄先・順路に関するルール	2007.5	×	マイクロバス利用山行におけるマイクロバス(ハイエース)周回ルートの見直しとルール化
10	TTCメンバ間の電子メール利用ルール	2007.7	○	メンバ間の電子メール通信に関するルール化、アクセス制限等
11	ヒヤリ・ハット報告書/危険予知報告書(様式)	2010.7	×	定型様式を定め、事例があった場合は世話人会に速やかに報告することを制度化

No.	事故の名称	発生年月	山行名	当事者	発生状況
1	凍結道で転倒し手に軽傷	2008.12.6	大菩薩嶺～大菩薩峠	59歳男性	雷岩～大菩薩嶺間の森林帯の登山道を歩行中、凍結面に足をとられて転倒して、手に裂傷を負う。アイゼンを持参していなかった。
2	帰路マイクロバス内貧血による失神	2009.1.10	石割山新年山行	70歳女性	石割山新年山行からの帰路のマイクロバス内で、突然顔面蒼白となって気を失う。鮎沢PAIに車を留め、看護師のMKさんの貧血との的確な診断と迅速な応急処置により、すぐに回復した。紅富士の湯で飲んだアルコールが効いたようだ。MKさんがいなかったら間違いなく救急車を呼んでいた。
3	急な下りで転倒して頭部打撲	2009.5.31	安達太良山～箕輪山	69歳女性	箕輪山の粘土質の土がえぐれ、雨で濡れて滑りやすくなった急な下りで足を滑らせて転倒し、頭部を強打して大きな瘡を作る。その場で患部を冷やし10分ほど安静にして様子を見てるうちに回復、事なきを得る。
4	雪渓をトラバース中にスリップ滑落	2010.7.18	中ア木曾駒が岳濃が池～駒飼ノ池	70歳男性	雪渓をトラバースし、対岸に足を踏み出したところで、バランスを崩して雪渓上を約20m滑落して自然停止。幸い怪我をせずに済んだ。7月中旬の3000m級の山行にも拘わらず軽アイゼンを携行していなかった。ヒヤリハット報告書提出。
5	ハイマツの根に足を引っかけて転倒、頭部裂傷	2010.7.18	北ア大喰岳～中岳の稜線	65歳男性	雷鳥の写真を撮ろうとカメラを構えて雷鳥の後ろを追う余り、足元の安全確認がおろそかになって、ハイマツの根に足を取られ転倒し、斜面をバウンスして、岩に頭部を強打し裂傷。急峻な岩稜上で写真を撮影する際は、立ち止まって周りの安全を確認してから行動する鉄則を忘れてしまった。ヒヤリハット報告書提出。
6	浮石に乗りバランスを崩して岩に足を挟まれる	2010.7.19	北ア涸沢岳の沢の川付附近	65歳男性	登山道の真ん中にある石が浮石と判らず、乗った瞬間バランスを崩して転倒したが、弾みで右足が岩に挟まれて宙ぶらりん。もし、足が挟まれていなかったら滑落して死亡していた。急峻な岩稜では先行者の足取りをよく見て、浮石に乗らないよう、全神経を集中して歩くことが肝要。ヒヤリハット報告書提出。
7	往路電車内乗り過ごしリタイア	2011.2.05	奥多摩高水三山	61歳男性	公共交通機関利用の山行で、八王子から立川に向かうJR中央線の電車内で寝てしまい、立川駅で下車出来なかった。朝の満員電車内のため他のメンバーも気が付かなかった。対応として、公共機関利用の山行では、原則現地集合とする。
8	マイカ自損事故	2011.7.27	後立山ルンペン登山パーティ	71歳男性	登山を終え、白馬町新城遠見尾根登山口のペグマに預けてあったマイカを回収に行った際、左前輪を側溝に脱輪させ、タイヤ側面とホイールを損傷。タイヤ交換に要した費用の50%をマイカ所有者を除くメンバー7人で負担。2003年制定の「マイカ山行の車両利用規定」の初の適用例となる。ヒヤリハット報告書で経緯を報告し、マイカ山行のリスクについて再認識しあう。

表6 最近5年間でTTC主催山行中に発生したアシテント・事故

No.	事故の名称	発生年月	山行名	当事者	発生状況	保険の給付状況	
						スポーツ団体傷害保険	日山協 遭難捜索保険
1	右足小指骨折	2008.6.01	未丈が岳	56歳女性	沢を素足で渡渉中、水中の岩に小指が当たり痛みと異常を感じる。SLが付き添って自力下山し、登山口に待機。帰宅後病院で右足小指骨折と診断。	○	×
2	左肩脱臼	2009.11.07	背戸峨廊・大滝根山	57歳男性	背戸峨廊の滝下の濡れた岩場で滑って転倒、左肩を強打して脱臼。左肩をテープで固定し、SLが付き添って自力下山。救急車でいわき市の救急病院で治療。その後パーティ本隊に合流。	×	×

S氏は、9代目の代表である。TTCの主要な役割である会計係は現在3代目／就任5年目、TTC通信編集責任者である広報係は3代目／就任10年目である。TTC公式HPの運用管理は2003年にサイトを立ち上げて以来8年間、K氏がお一人で担当している。TTC設立メンバー11人中、5人が世話人として残っているが、70歳を迎えた設立メンバー並びにそれに準ずる主要世話人で、ご本人から申し出があった3名の先輩メンバーには、顧問として世話人会に引き続き席をお願いして頂き、クラブの指導・助言をお願いしている。

世話人全員が集まったの定例世話人会は、毎月実施される例会前の30分間と短い時間内で開催しているため、この中で十分議論して意思の疎通を図ることが困難である。このため、議題がある場合は、

随時電子メールを利用した稟議により、世話人全員の情報共有化と意志統一を図っている。また、例年1月には、拡大世話人会を開催し、約半日かけて活動の総括や次年度の活動方針、世話人体制と担務、年間山行計画の世話人会案等を作成している。今回の15周年記念誌制作の実務を担う編集委員も世話人の中で分担頂いている。

なお、世話人会においてTTC活動の基本に関わる重要な方針を決定する際や新たに発生した問題を解決しなければならない際には、TTC創立以来、世話人全員の意見一致によって決定するプロセスを大切にしたい民主的運営を基本にしている。また、TTC創立時に掲げたメンバーのWillを何よりも大切にしたい民主的運営を担保し、特定の世話人や執行担当者が

恣意的に運用することがないように、世話人会で定めたクラブ活動の基本に関わる方針やルールを規約・規定として文書に明文化して(表4参照)、当クラブのHPに掲載するなどして、広く公開周知している。これら規約・規定が現状に合わなくなったり、見直しが必要になった際は、前述したルールに則り、世話人全員の合意を得た上、至近の例会に諮って、メンバーに承認頂くプロセスを経て適宜改訂・運用している。

2.5 安全登山対策と遭難対策

当クラブではクラブ創設直後の南アルプス仙丈が岳山行での骨折事故以来、安全登山第一主義を行動規範として徹底し、メンバーを山岳遭難事故で失ったり、大怪我を負うことがないように、また、第三者や家族・関係者に物理的・金銭的に迷惑をかけたることがないように、事故発生防止に最大限の努力を払うとともに、万一の事故の際の遭難対策について取り決め、対応している。

安全登山対策の具体的対応策としては、a)山行計画段階での山行計画の綿密な安全対策、b)大事故に繋がるヒヤリ・ハット事例のメンバーへの積極的な周知と再発防止策の徹底、c)悪天候が予想される場合のマイクロバス利用山行中止ルールの策定、d)定常的な安全登山教室の開講、等を実施している。

a)に関しては、メンバー提案山行を含め、全てのTTC主催の山行計画書は安全登山の観点から計画係を中心に安全審査し、安全上不十分な箇所があればアドバイスして、計画内容を訂正・補強してもらってからメンバーに提案している。そのかわりTTC主催山行の計画段階から実施後の総括までの一連の流れの中で、不都合や問題が生じた場合は、世話人全員の共同責任によって問題解決に当たることを基本にしている。

b)に関しては、軽重の差異はあるものの、山岳遭難や骨折・怪我・疾病等の突発事故のリスクは必ず伴う。また、重大な事故の陰には、事故の芽となるヒヤリ・ハット事例が多数発生することは避けられない。そのような観点から、TTCでは、ヒヤリ・ハット事例が発生した場合、見過ごすことなく、積極的に事例をメンバーに公開周知して、再発防止に役立てることを基本方針にしている。表5は、この5年間に発生した主なヒヤリ・ハット8例のリストである。とくに2010年夏季のビック山行において、3件の深刻なヒヤリ・ハット事例が立て続けに発生したことから、ヒヤリ・ハット報告様式を定型化・制度化して、発生状況と是正策について、メンバー全員にすぐさま周知するとともに、HPの会員限定ページ

にその情報を公開して、情報の共有化を図り再発防止に資するよう努力している。なお、最近5年間にTTC主催山行中に発生した事故を表6に示す。足小指骨折と左肩関節脱臼の各1件で、前者はSLが付き添って下山・帰宅後医療機関を受診して治療。後者は現場で応急処置後、SLが付き添って自力下山し、救急車をお願いして地元救急指定病院で応急処置を受けたが、幸いなことにいずれも軽度な怪我で済んだ。創立時から10年間で3件の骨折事故があり(詳細は10周年記念誌[やまなみ No.2]掲載「10年間のTTCの歩み」参照)、これを合わせると15年間で、5件の骨折・脱臼事故が発生したことになるが、何れの場合も、TTCパーティメンバーで自力解決しているので、山中で地元県警ヘリコプタの救助要請や、山岳救助隊・山小屋関係者等のお世話になったことはまだない。従って、毎年警察庁から発表される山岳遭難事故統計に数えられる事故は、TTCではこれまで1件も発生させていない。ただし、この15年間に実施したTTC主催山行への参加メンバーの延べ人数は約5900人であることから、軽度であるとはいえ、TTC主催山行での骨折等の事故発生確率は1180分の1と計算される。同種の山岳同好団体のそれと直接比較できるデータを知らないのですが、TTCの事故発生確率の実績値の是非を論ずることはできないが、相当低い数値を維持できているのではないかと推定している。

c)に関しては、悪天候の天気予報に際しての山行実施可否判断は、担当CLの判断に委ねられている。公共交通機関利用やマイカ利用山行であれば、実施日前日まで天気予報の状況を見定めてから、可否判断をすることが容易である。しかし、TTC主催山行の約50%を占めるレンタカを利用したマイクロバス山行の場合、キャンセル料なしで、直前に気軽に中止にすることは困難であったため、CLは悪天候の際の代替え案を準備しなければならず、これが、担当CLの精神的負担を大きくし、CLの引き受け手を少なくしている原因の一つになっていた。レンタカ会社とIドライブの交渉により、2009年度から悪天候を理由にした実施3日前の営業時間帯(8:00PMまで)にキャンセルをお願いすれば、キャンセル料なしで中止できるルールが確立できた。これ以降、実施3日前時点の天気予報が悪天候である場合は、躊躇することなく中止判断できるようになったのは、レンタカ利用山行においても安全登山第一主義を実践できるようになった点で大きな前進である。図8に天候並びに立案者やCLの都合等のその他の理由によって中止になった山行件数の年度推移を示す。

表7. 悪天候等の理由により行程直前または途中で撤退ないし行き先変更したTTC主催ビック山行

No.	山行名	実施日	行程	内容
1	薬師岳・黒部五郎岳	2007.8.6-8.9	夜行2泊3日	台風接近により、日程を急遽1週間遅らせて実施。
2	八が岳硫黄岳	2008.1.12-1.13	1泊2日	強風のため硫黄岳を諦め赤岩/頭から撤退・下山。
3	大雪山・トムラウシ天幕縦走	2008.7.10-7.14	4泊5日	北沼からトムラウシ頂上を狙うが強風で断念し、南沼にキャンプ。翌朝、再度トムラウシ頂上を狙うが雷混じりの強風に阻まれ断念。頂上を踏まずに下山。
4	一切経山・吾妻小富士(船形山代替)	2009.10.17-10.18	1泊2日	船形山山行実施1週間前に本州を縦断した台風18号により林道が崩落し実施困難に。急遽代替え山行として一切経山登山を立案・実施。
5	立山・剱岳	2009.8.20-8.22	2泊3日	剱山荘から剱岳頂上を目指す日、天候が崩れて風雨が強くなるとの予報に早々に剱岳登頂を諦め、真砂岳(内蔵助山荘)に向かう。
6	岩菅山(五色が原～薬師岳代替)	2010.8.10-8.12	2泊3日	台風4号上陸により悪天候が予想される薬師岳縦走山行を出発前日に取りやめ、急遽志賀高原岩菅山代替え山行を立案・実施。

表8. TTC安全登山教室の開講状況と山岳保険加入見直し等

年度	開講回数	主な内容
2007	7	遭難保険を軽登山からオールリスク型に変更。山の救急救命・応急処置等
2008	8	救急救命実技、丹沢山の生い立ち、地形図、UIAの知識等
2009	8	用具・装備の基礎知識、読図、気象、ロープワーク、トムラウシ遭難事故等
2010	8	登山の生理学、山の天気、地形図活用法、トムラウシ遭難事例研究等
2011	8	遭難保険を選択性に変更。救急救命法、放射能の基礎、

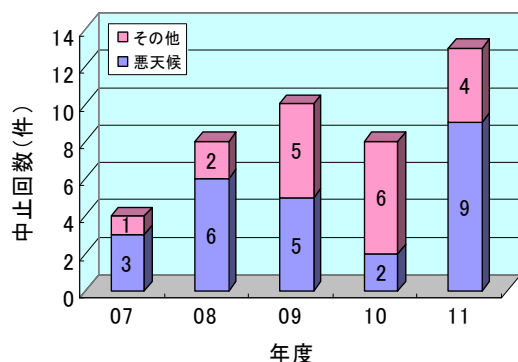


図8.中止山行件数の年度推移

年度によって異なるが、悪天候による中止は年間 2～9 件前後である。また、山行実施中あるいは実行直前に天候あるいは現地アクセス道路の崩壊等のアクシデントで、撤退ないし中止あるいは行き先を臨機応変に変更したビック山行の代表例を表7に示す。トムラウシ山頂を踏めば、日本百名山全山登頂を達成するメンバが参加していたとしても、パーティメンバの安全が確保できないとリーダーが判断すれば、頂上走破を潔く諦めて撤退する等、TTC には安全第一主義を行動規範とするカルチャが根付いている。

d) メンバに対する安全登山に関する知識・技術・意識を向上させるため、TTC では1999年から例会開催に合わせ安全登山教室を定期的で開催し、その向上に努めている。最近5年間の開催状況を表8に示

す。安全登山教室のテーマは、登山の生理学、地図と磁石の使い方、山の気象学、計画立案方法、歩行時間予測法、救急救命法、ロープワーク等の基礎的知識の勉強の他、トムラウシでの大量遭難事故の状況学習や山岳遭難事例の研究、外部講師を招いての丹沢山塊の生い立ち、地元救急救命隊による救急救命蘇生法の実技訓練等、多方面にわたり、年間7～8回実施している。講師は世話人が交代で担当し、手作りのテキストを準備したり、既存の資料を利用したりと、工夫を凝らしている。安全登山教室を効率的に実施する上での悩みとして、受講者にベテランメンバと新人メンバが混在しているため、全てのメンバのレベルに合わせた講義内容を選択することが実行上困難なことである。従って、ベテランメンバには分かり切った初歩的な知識を繰り返し講義する羽目になり、反対にベテランメンバが興味のある話題にすると新人メンバに理解してもらえない恐れが多い等の悩みを抱えながら、試行錯誤を繰り返して継続実施している。

次に当クラブの遭難対策の具体例について述べる。まず第一に、メンバ全員に山岳遭難保険加入を義務づけていることである。当初、団体活動中の傷害・入院・通院・死亡を補償対象にした団体スポーツ保険と日本山岳協会共済会の中高年登山者を対象にした軽登山対応の遭難捜索保険の2種類の山岳保険に加入していた。ところが、軽登山対応の山岳保険は、

表9. TTCメンバが加入している山岳遭難保険の概要

保険の名称	種類	保険料(年額)	保険金支払い対象と保険金額(最高額)						保険金支払対象		備考
			遭難救助費用(円)	死亡保険金(円)	後遺障害(円)	入院給付金(1日)	通院給付金(1日)	個人賠償(円)	TTC主催山行	個人山行	
c スポーツ安全保険(加入区分C/軽登山)	団体傷害保険	1,600円	0	2,000万	2,000万	4,000円*	1,500円*	1億円	○	×	所属団体管理下における事故、並に現住所から現地までの経路往復中の事故。届出種目:軽登山。
b 日本山岳協会共済山岳遭難・捜索保険(山岳登山AコースB型)	山岳遭難保険	会費1,000円、掛金5,420円	150万	159万	159万	0	0	1億円	○	○	オースタイク(冬山・岩壁登山・海外登山・疾病を含む)。ただし海外登山の場合、遭難救助費用は対象外。
a 日本山岳救助機構(JRO)山岳遭難捜索費用カバレッジ制度	遭難救助互助制度	初年度入会金1,900円/年会費1,900円	330万	0	0	0	0	0	○	○	遭難救助費用に特化した互助機構。2年目以降、費用(会費)は実費精算(800~900円)

*:支払い対象期間は事故の日より180日以内。そのうち、通院給付は90日以内。(注)2011年度より加入保険選択制度を採用(Aコース(a+c)加入)/Bコース(b+d)加入)

表10. TTC所有備品および共同装備品リスト

No.	品名	数量	購入金額	入手年度	規格・仕様等
1	コピー機	1台	120,109	1998	富士ゼロックスXC810型
2	モノクロレーザーOA複合機	1台	48,800	2007	CanonMF4150型
3	USBメモリ	5個	7,900	2007	Buffalo製0.5GB
4	500GB外付ハードディスク	1台	9,936	2009	Buffalo HD-HE500-U型
5	ザイル(8mmx40m)	1本	15,592	1998	登山用
6	固定ザイル(10.5mmx50m)	2本	—	2006	栃木県防災ヘリより寄贈
7	トランスバ(430MHz帯)	2台	33,013	2000	出力0.6W
8	トランスバ/シーバ①	1台	35,490	2003	iocom IC-190型/5W/3バンド
9	トランスバ/シーバ②	1台	31,290	2004	iocom IC-190型/5W/3バンド
10	レスキューベルト	1本	2,730	2002	カビナ付
11	テント①(モバール4人用)	1張	55,965	2003	グランドシート付属/3シーズン用
12	テント②(エスペース4人用)	1張	58,852	2003	スーパライト/3シーズン用
13	テント③(エスペース3人用)	1張	—	2003	山口・辻・小嶋3氏より寄贈
14	ツェルト①(2~3人用;黄色)	1張	—	2006	三村さんより寄贈、石井スポーツ製
15	ツェルト②(2~3人用;緑色)	1張	—	2006	佐々木さんより寄贈、エスペース
16	ツェルト③(2~3人用;黄色)	1張	14,840	2009	IBSスーパライト
17	ツェルト④(2~3人用;黄色)	1張	—	2009	山口さんより寄贈、アライズスーパライト
18	中型クッカーセット	1セット	4,200	2008	アルミ製
19	フライパンセット	1セット	5,566	2008	チタン製(トング、お玉、フライ返し付)
20	キャリーフ(簡易担架)	2枚	—	2008	佐藤(末)さんより寄贈
21	大鍋(径48x深22cm)	1セット	—	2010	門間さんより寄贈、アルミ製/タ付
購入金額合計			444,283		

(注)共同装備品購入資金原資は全て山行カンパ積立金から拠出。

保険掛金が安い反面、アイゼンを装着しての登山や、山中での疾病発病に起因した救助等は補償の対象外であるなど、TTCの活動実態に合わない内容であることから、2008年に全面的に見直しを実施した結果、軽登山対応の遭難捜索保険からあらゆるリスクにも対応する日本山岳協会共済会の山岳遭難捜索保険B型に変更した(表9参照)。また、2010年度に再度見直しを行い、日本山岳救助機構JROがすすめる全く新しい発想の遭難救助互助制度にも選択加入できる制度に改めた。2011年現在、従来の日本山岳協会共済会の山岳遭難捜索保険加入者は16名、新規のJRO加入者は31名である。

なお、過去15年間のTTC主催山行中に発生した山岳事故5件のうち、スポーツ保険の補償を受けたケースは4件であるのに対し、遭難捜索保険の保険金請求事例は幸いなことにまだない。

当クラブの第2の遭難対策として、メンバに万一の事故が発生した際に発生する多額の経済的負担を軽減するため、メンバ全員で年間3000円を遭難対策基金として積立てている。幸いこの15年の間に遭

難積立基金を取り崩すような事例がないため、現在遭難対策積立金総額は181万円に達している。なお、本遭難対策積立金の支払い対象は、TTC主催山行だけではなく、TTCメンバが個人山行として実施した山行の場合であっても、事前に当クラブに山行届兼山行計画書を届け出た山行において発生した遭難事故に対しては、TTC主催山行の場合と同様に、TTCとして遭難救助を支援するとともに、前述の山岳

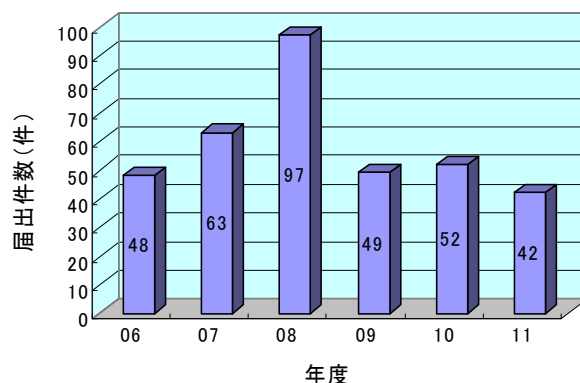


図9.個人山行届件数の年度推移

保険で賄いきれない費用について、積立金を取り崩して支払う規定になっている。その前提となるメンバが個人的に実施する山行に対する個人山行届兼計画書のTTCへの提出を啓蒙しているが、届け出の提出件数は、図9に示すように全体として伸び悩んでいる。

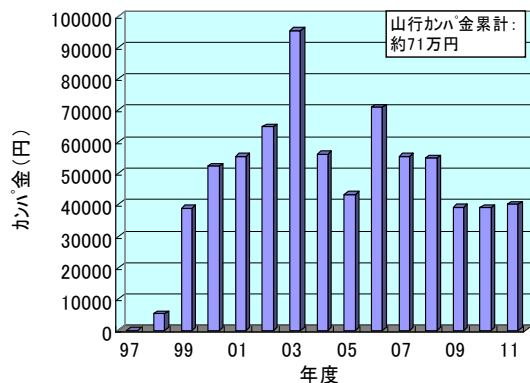


図10. 山行カンパ金の年度別拠出額

2.6 クラブ運営費と共同装備品の整備

クラブ運営の財政基盤をなすクラブ運営費用は、TTC創設以来、基本的に月額300円の会費で賄っている。TTC活動の基本は山を愛するメンバの自発的なボランティア活動が基本である。従って、世話人やリーダー、執行担当者に報酬は一切支払っていない。また、新規メンバの入会時に入会金を徴収するようなことも一切していない。TTC発足当時は、クラブが毎月発行するTTC通信、例会議事録の他、大量に発行する山行計画書や山行記録等の資料は全て紙に印刷して、メンバにその都度郵送していたため、その経費を月額300円の会費で賄うことが困難になり、会費値上げを考えざるを得ない時期もあった。しかし、当クラブは、メンバの平均年齢が50歳代～60歳代であるにも拘わらず、大部分のメンバはパソコンを所有し、電子メールでコミュニケーションをとることが可能な状況にあった。そこで、ITが不得意なメンバに対しては、PC教室を開催して、PCの操作方法やメールの使用法を覚えてもらう等の方策を進めながら、前記資料配付を全て電子メールに添付した電子ファイル配付方式に改めた。この結果、TTCの運営経費は劇的に軽減し、月額300円の会費のみで余裕を持って運営できるまでに改善でき、複合OA機等の高額備品もこの会費の中から購入している。ちなみに、2011年現在のTTC現役メンバ49名のPC保有兼電子メール使用者は45名／91.8%に及んでいる。

TTCの財政を支えるもう一つの柱に山行カンパ金会計がある。TTC主催山行に際し、費用実費を計算して、その金額に見合う費用を参加メンバから徴収

する際、費用徴収を簡素化するため、集金は100円単位までとし、一人あたり100円以下の端数は余剰金として、TTCにカンパすることにした。その後、テントやツェルト、ザイル、無線機等をTTCの共同装備品として、取りそろえる必要が出てきた。また、5周年記念誌や10周年記念誌の発行経費を捻出する必要性が生じた。そこで、カンパ金の金額を少し膨らませ、山行参加者から、一人・一回当たり、百数十円～2百数十円程度カンパ頂く現行の山行カンパ金会計制度ができあがった。図10にカンパ金拠出額の年度推移を示す。年度によってバラツキはあるものの、年間4～7万円程度集まり、この14年間で、総額約71万円のカンパ金が拠出された。山行カンパ金は、表10に示すTTC共同装備品リストに記載されているとおり、44.4万円が共同装備品の購入に充てられ、約15万円が2冊の記念誌発行経費に充当された。また、2011年3月には、山行カンパ金から10万円を東日本大震災義援金として拠出した（TTCの義援金拠出金総額は32.9万円）。このようにして、山行カンパ金は月額300円の会費と並ぶTTCの2大資金源として、山行活動に有効に活用されている。

2.7 広報活動とTTCホームページの運用

TTCメンバ向けの広報活動の両輪として、TTC通信と例会議事録が毎月一回発行され、メンバに配付されている。TTC通信には、例会や世話人会での決定事項の周知、前回のTTC通信発行以降に実施された山行の実施状況、至近に実施される山行予定の状況、新規加入メンバの紹介、次回例会や安全登山教室の会場や実施時間等の周知事項の他、連載記事として、メンバが順番で登場する連載投稿コラム「私の一山」に続いて、「山に想う」シリーズを掲載中である。また、その他、安全登山豆知識シリーズとして、種々の安全登山に関する知識や動向、「山の花・野の花」のタイトルで、季節に応じた高山植物の写真とその特徴について解説したコラム等を掲載している。TTC通信を発行し始めて12.5年目の150号から、紙面をA4版1ページ構成から2ページ構成に充実させ、2011年12月号で、No.177を刻んでおり、TTCメンバに広く愛読されている。なお、この5年間に発行されたTTC通信は第2部資料集1に収録されている。

TTC例会開催前には世話人会、安全登山教室並びに月例会の議事内容について案内が配付される。また、例会終了後には、例会で配付された資料のリスト、討議された議題や決定事項、新たに募集された山行への応募状況やCL/SL等のパーティスタッフ名、例会出席者名等を記載した例会議事録が作成・

配付される。出席できなかったメンバであっても、この例会議事録とTTC通信を一読することにより、クラブの活動状況を正確に把握でき、全メンバで情報を共有することが可能である。

TTC活動の証となる年度総会資料、山行計画書、山行記録、山行参加者名簿、安全登山テキスト、TTC通信、例会議事録等のTTCが発行する全ての公式資料は、資料保管係によって電子ファイルの状態では保管管理されている。また、TTC主催山行の際に写真撮影係等によって撮影されたデジカメ写真データも同様に写真保管係の手によって一括保管管理されている。

次にTTC公式ホームページ(HP)の運用状況について述べる。TTCのHPはK氏の努力によって2003年度に立ち上げ、2006年度には、ファイル容量を従来の10倍の1GBに増やすとともに、内容の充実を図り、現在に至っている。2003年時点から2011年12月までの年間アクセス数の年度推移を図11に示す。

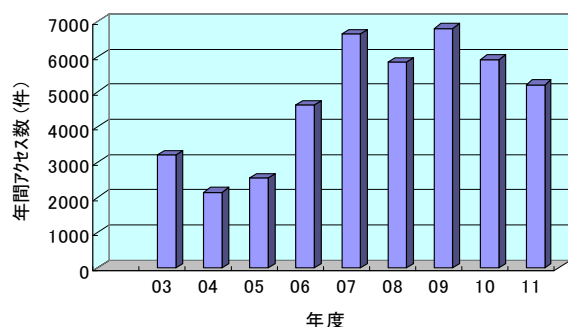


図.11. HPへのアクセス数推移

HPへの年間アクセス数は、内容の充実を図った2006年度以降、それまでの年間2000~3000件から、4000~6000件へと倍増し、今日に至っている。この間、個人情報保護法が施行されたのに伴い、2007年1月にはTTCメンバ並びにそれ以外の個人の情報がHPに不用意に露出しないよう運用規定を定めた。具体的には、TTCメンバ以外の個人が識別できるような写真は、当該個人から掲載許可を得た場合を除いて掲載しない。山行実施記録等に従来記載されていたTTCメンバの氏名等を削除する。メンバ向けに発行されるTTC通信並びに山行計画書等は、パスワード付の会員専用ページに移し、メンバ外非公開とする等の措置を講じた。なお、2011年12月に会員専用ページのパスワードが外れて、メンバの個人情報が記載されていた山行計画書等がネットに流出するインシデントが発生したことから、それ以来会員専用ページの運用を停止している。

HPの公開ページには、TTC主催山行を実施するたびに、その際のスナップ写真と山行実施記録が迅速にアップロードされており、その他に、TTCの主な規約・規定類集、「10年間のTTCの歩み」、新規会員募集案内等が掲載されている。TTC会員の大半は、新規の山行記録がアップロードされる度に頻りにアクセスしている。記録に残るTTC-HPへのアクセス件数のうち、TTC関係者以外の方のアクセス比率がどのくらいあるのかは定かではないが、TTCへの問い合わせと入会希望者のほとんどが、HPを閲覧してアクセスしてきていることから、TTCを外部にPRするためのツールとして十分機能しているものと評価される。事実、2009年10月3日の朝日新聞朝刊第2神奈川北版に、TTCのHPを閲覧した記者により、TTCの紹介記事が掲載された。

最後に、デジカメ写真データのメンバ間のやりとりに関するIT化のトピックスをもう一つ紹介する。従来、山行時に撮影した写真は、印画紙にプリントしてメンバに配付したり、データを移したUSBメモリでやりとりするか、迅速を要する場合は、デジカメデータをメールに添付して関係メンバに配付していた。この場合、大容量の写真データを個人のメールに添付して送付することにより、個人のPCがハングアップして動かなくなる等のトラブルが続発するようになった。このトラブルを解決する方法として、2008年後半頃から、CanonやYahooが運営する専用のアドレスにWebアルバムとして撮影したデジカメデータをアップロードしておき、そのアドレスをTTCメンバにメールで公開することにより、写真が必要なメンバがWebアドレスにアクセスして、必要な写真を各自でダウンロードする方式を浸透させた。これにより大容量の写真データのやりとりに伴うPCトラブルの問題が一旦に解消し、TTCにおける写真配付のスタンダードとして定着している。

2.8 リーダ層の育成と世代交代

TTC創立から10年間は、TTC創立以来のメンバである3名の男性メンバが、TTC主催山行の大半のCLを担当し、TTCの山行活動を実質的に支えてきたことは、10周年記念誌「やまなみNo.2」の『10年間のTTCの歩み』に述べられている。この時点で上記3名の主要メンバも60歳後半の年代を迎えたことから、このままでは早晩TTC活動が継続できなくなるとの危機感から、リーダー層の育成が急務であり、最重要課題であるとの認識に立ち、2005年ころから、これまでのメンバ内からのリーダーの育成と新規加入

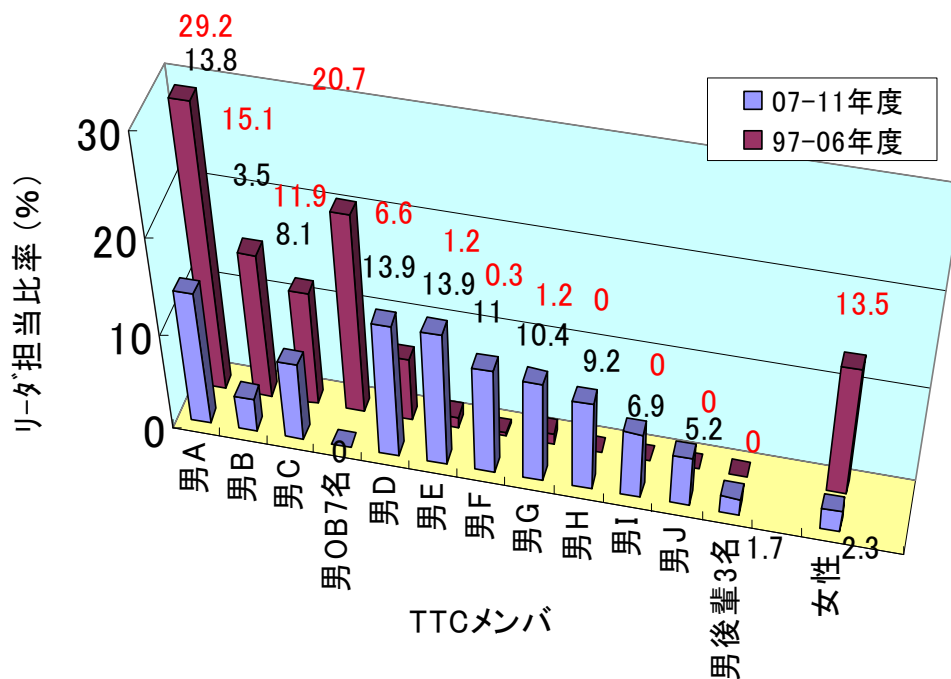


図.12. TTC主催山行の個人別リーダー担当回数

した若手メンバを世話人に登用した上、リーダーとして育成する種々の方策を講じてきた。それらの施策が徐々に実り、この5年間にニューリーダーが次々に育ち、リーダー層の世代交代が確実に進展している。

図12にTTC創立後10年間の個人別リーダー担当回数と、最近5年間の個人別リーダー担当回数に分けて、グラフにして示した。最近5年間に、前述した3名の男性がCLを担当した回数は激減し（担当比率：65%から23.4%に）、それに代わって、男性D～男性Jまで7名のリーダーが交代でリーダーを担当するようになってきており（7名で70.5%）、その内、男性Dを除く6名は、5年前まではTTC山行リーダーを経験したことがほとんどない新メンバである。ただし、ひとつ気になる点は、男性リーダーが育ってきたのに反比例するように、女性がリーダーを務める山行が激減してしまったことである。このデータから、メンバの過半数を占める女性メンバからのリーダー層育成には成功していないことがわかる。この点に関しては、当クラブの今後の重要課題の一つであるといえる。

TTCの諸活動を後輩メンバにスムーズにバトンタッチしていく上で、もう一つクリアしなければならない問題として、執行体制の交代がある。具体的には、現担当者の個人的なスキルと多大なボランティア精神で成り立っているTTC通信の編集担当者ホームページ管理者の後継者の目処が完全に立っていないことである。しかし、新たに担当する後継者の

身の丈にあった方法と内容に変えながら、TTC創立時の高い理想を受け継いだ活動を続けて行ってもらえば良いとしたい。

3. むすび

2007年度から2011年度までの最近5年間のTTCの活動内容について、客観的データに基づいて、出来るだけ定量的かつ具体的に述べた。創立15周年を契機にTTCの活動の中心は、創立以来の主力メンバから新たに育った新リーダー層にバトンタッチされることになろう。本文はTTC活動を正確かつ詳細に記述した5年間の活動記録であり、次の20年周年に向けての活動方針を定める際の参考資料として十分役立つ内容になっている。今後TTCが飛躍するための参考資料として有効に役立てていただければ、編集者としてこれに勝る喜びはない。

TTC創立以来掲げてきたTTCの高い理想を堅持しつつ、新たな執行体制のもと、新たな発想により、小さくてもきらりと光る地域山岳同好会としてTTCを益々発展させて頂けたらと願っている。

【文責：三村 義昭】

付属資料:2006年度～2011年度までのTTC主催年間山行実施結果一覧。

